

フィリピン映画100年目に生まれる 物語の新しい型

2019年のフィリピン映画

山本 博之

フィリピン映画が100周年を祝った2019年、この年の最後を飾ったメトロマニラ映画祭では、興行収入の首位を毎年のように塗り替えてきたヴァイス・ガンダ主演のコメディ映画が振るわなかったことが1つの話題となった。メトロマニラ映画祭で上映されるヴァイス・ガンダ主演作品の興行収入は毎年増え続け、2018年には596百万ペソに達していたが、2019年の『The Mall, The Merrier』は305百万ペソだった¹⁾。

フィリピンでは人気の映画が繰り返し別の作品に参照される。2019年のメトロマニラ映画祭の上映作品に『愛について書く』というラブコメ映画があった。ラブコメ命の新米脚本家がインディー至上主義の先輩脚本家と組まされ、恋愛観も作品観も異なる2人がラブコメ映画論を戦わせながら脚本を書き上げ、その過程で2人の間に恋愛感情も育っていく。作品中で『ワンモア・チャンス』(One More Chance)²⁾と『運命というもの』(That Thing Called Tadhana)³⁾が随所で引用されており、フィリピンのラブコメ映画を代表するこの二作品の影響力の大きさが感じられる。

メトロマニラ映画祭以外の作品では、もはやフィリピンのラブコメ映画の古典となった『ワンモア・チャンス』のキャシー・ガルシア・モリーナ (Cathy Garcia-Molina)⁴⁾監督による『ハロー、ラブ、グッバイ』(Hello,

Love, Goodbye)⁵⁾が話題になった。フィリピンのヒット映画を多く作っているキャシー監督作で、興行収入はフィリピン映画として歴代最高の881百万ペソに達した。

香港を舞台にフィリピン人の男女が出会い、恋に落ちて別れるまでを描いた『ハロー、ラブ、グッバイ』は、これまでのフィリピン映画にないいくつかの新たな試みが話題になった。フィリピンのテレビ局にはABS-CBNとGMAの二大ネットワークがあり、芸能人は基本的にどちらか一方のネットワークと契約し、契約期間中にもう一方のネットワークには出演しない。したがってABS-CBN系の芸能人とGMA系の芸能人がそれぞれのネットワークと契約したまま共演することはない。『ハロー、ラブ、グッバイ』はABS-CBN系の看板女優とGMAネットワークの人気俳優の共演が話題になった。

また、フィリピンでは、映画やドラマで恋人どうしを演じた男女の俳優が他の作品でも恋人どうしを演じる「ラブチーム」が多く見られる。ラブチームには熱狂的なファンがつき、私生活でも恋人どうしになるラブチームも珍しくない。『ハロー、ラブ、グッバイ』は異なるラブチームにいる男女の俳優が組んで恋人役を演じるという新奇性でも話題になった。

これらに加え、『ハロー、ラブ、グッバイ』は、フィリピン映画の定番である「泣く男」と「報われない母」を織り込みながら⁶⁾、どちらも定型と異なる結末をたどった。フィリピン映画の物語に新たな型を生み出す画期になる可能性があり、フィリピン映画の100年目

1) ただし、これはヴァイス・ガンダの人氣が衰えたということではなく、ヴァイス・ガンダを見出したウェン・デラマス監督が2016年に死去した喪失の大きさを意味しているように思われる。ヴァイス・ガンダとウェン・デラマスについては[山本 2018a]を参照。

2) 『ワンモア・チャンス』は2007年のフィリピン映画。監督はキャシー・ガルシア・モリーナ。ラブコメ映画の古典。主人公のバシャとポボイの泣かせるセリフが人氣を博し、名セリフのリストが作られ、ノベライズ版が出版された。ポボイを演じたジョン・ロイド・クルースの「泣き男」ぶりでも評判になった。『ワンモア・チャンス』についてはWebサイト〈<https://ameblo.jp/garakuta-fuun/entry-12147016643.html>〉の記事に詳しい。

3) 『運命というもの』は2014年のフィリピン映画。監督はアントワネット・ハダオネ。第10回大阪アジア映画祭で上映された。劇中で主人公が『ワンモア・チャンス』の映画を観ながら場面にあわせてバシャのセリフを口真似して号泣する。

4) キャシー・ガルシア・モリーナ監督については2019年7月に書かれたWebサイト〈http://garakuta.blue.coocan.jp/denei/philippines/2019/philippines_column_09.htm〉の記事が詳しい。

5) 2019年9月1日にサンパル荒川(東京都荒川区)で上映されたときの宣伝ポスターには『こんにちは、愛、さようなら』と書かれた。

6) 「泣く男」と「報われない母」は後述する。[山本 2018a]も参照。

の節目の映画としてふさわしいと言えるだろう。本稿では、『ハロー、ラブ、グッバイ』を取り上げ、フィリピン映画が語ってきた家族の物語の系譜に位置付けながら作品を読み解き、この作品が試みている新しい物語の型の可能性について考えてみたい。

『ハロー、ラブ、グッバイ』にみる 新たな家族像・女性像・英雄像

はじめにフィリピン映画史の100周年について簡単にまとめておこう。フィリピンで最初に映画が制作されたのは1912年のことである。作られたのは『ホセ・リサールの処刑』と『ホセ・リサールの生涯』で、興味深いことにどちらもフィリピンの国民的英雄ホセ・リサールの物語だった。ただしどちらの作品もアメリカ人の制作によるものであり、フィリピン人によって作られた最初の映画は、ホセ・ネポムセノ (Jose Nepomuceno) 監督による1919年の『田舎の乙女』(Dalang Bukid) である。したがって2019年は『田舎の乙女』から始まるフィリピン映画史の100年目にあたる。

ホセ・リサールはフィリピン国民であれば知らない者がいない国民的英雄で、学校での演劇をはじめとしてさまざまなメディアでホセ・リサールの物語が繰り返し演じられている。映画やテレビドラマでは端正な顔立ちの若い役者たちが歴代のホセ・リサールを演じてきた。最近では、2014年のテレビドラマの『イラストラード』(Ilustrado)で、2010年に役者デビューしたばかりのアルデン・リチャーズ (Alden Richards) が主役のホセ・リサールを演じた。

当時アルデンの知名度はそれほど高くなかったが、2015年に平日の昼のバラエティー番組の企画で、同番組の出演者として他の出演者であるヤヤ・ダブと番組内で恋愛をはぐくむというドラマを演じた⁷⁾。アルデンとヤヤ・ダブの2人はアルダブと呼ばれた。アルダブの恋物語はコメディであり、ヤヤの養母に命じられてアルデンとヤヤは結婚まで互いに指一本触れることができず、2人が養母の目を盗んで出会うとするけれど毎回邪魔が入って入ってすれ違う様子が視聴者をやきもきさせた。アルデンはフィリピン映画の定型の1つである「泣く男」のはまり役で、ヤヤが

別の男性と結婚させられることになっても親に反対できずに涙を流すだけで自分からは決断も行動もとらず、奇跡が起こるのを待つだけだった。アルダブの物語は番組の企画によるフィクションだが、アルデンが番組の出演者としてヤヤとの恋をはぐくんだため、ドラマのアルデンと役者としてのアルデンは混然一体としていた。アルデンとヤヤのドラマのイメージをそのまま使ったテレビCMが多く作られたこともあり、役者のアルデンも品行方正で清廉潔白な性格だと思われるようになった。

一気に国民的な人気俳優となったアルデンは、『ハロー、ラブ、グッバイ』で主役のイーサンを演じた。イーサンはアルデンのイメージと正反対に、恋人がいる女性でも平気で口説くプレイボーイという役柄だった。

『ハロー、ラブ、グッバイ』でイーサンの相手役のジョイを演じたキャスリン・ベルナルド (Kathryn Bernardo) は、1996年生まれの23歳だが、7歳で子役デビューを果たしており女優のキャリアは長い。2012年にテレビドラマと映画での共演を通じてダニエル・パディリャ (Daniel Padilla) とラブチームを組み、私生活でも2人は恋人どうしであると公表している。『ハロー、ラブ、グッバイ』ではキャスリンがダニエルと共演せず、ダニエルではない俳優と恋人どうしを演じたことで話題になった。

●「家族のため」に国外で暮らす若者の恋

『ハロー、ラブ、グッバイ』は、香港を舞台にフィリピン人の男女が出会い、互いに恋に落ちて、別れるまでの物語である。男はバーテンダーのイーサン、女は家政婦のジョイで、どちらも家族のために自分を犠牲にするという考え方で自らを縛って生きてきた。

ただしイーサンは過去に一度「失敗」している。イーサンの両親はフィリピンから香港に働きに来て、イーサンたち3人の子をもうけた。香港では就業ビザで働きながら途切れずに7年間居住すると永住資格が申請できる。イーサンの両親は香港の永住権を得た。

イーサンの母が亡くなると、父は3人の子を1人で育てきれないために末の息子だけフィリピンの親戚に預けた。香港に残ったイーサンは大学で薬学を学び、定職について永住権を得たら末の弟を香港に呼んで家族全員が一緒に暮らせると夢見ていた。ところが

7) アルダブについては[山本 2016c]を参照。

恋人ができ、彼女がアメリカに行きたいと言うので一緒に行くか別れるかの選択を迫られた。永住権を申請するまで3年足りなかったのも、香港を離れるとそれまでの居住年数は無になるし、薬学の勉強も続けられなくなるからと家族から反対されるが、イーサンは恋人と一緒に暮らすことを選んでアメリカに渡った。しかしアメリカで恋人と別れ、薬学の勉強もうまくいかず、自暴自棄になったイーサンはオーバーステイで強制送還される。

香港に戻ったイーサンはバーテンダーになり、再び永住権申請のために居住年数を重ね、あと3年で永住権が申請できるようになっていた。イーサンを尊敬していた弟は、自分たちより恋人を選んでアメリカに行って大学のキャリアを無にしたイーサンに失望し、イーサンもその「失敗」のために自分を責めていた。イーサンはバーテンダーとして家族のために金を稼ぐ一方、結婚して自分の家族を作ることはず、出会った女性たちと遊びの関係しか作らない日々を送っていた。

ジョイは、フィリピンの大学で学んで看護師の資格を取っていたが、国内では仕事がないため、かつて母が家政婦として働いていた香港で家政婦として働いている。このまま7年間働き続ければ香港の永住権が申請できるが、ジョイの狙いは香港の永住権を取ることではなく、ジョイにとって香港は通過点でしかなかった。香港では家政婦としてしか働けないが、カナダなら看護師の資格で仕事ができるため、カナダに移住して仕事を見つけ、家族をカナダに呼び寄せることを夢見ていた。

●女性からの働きかけを契機に始まる交際

ジョイはカナダ行きのビザ代を貯めているが、フィリピンの家族への仕送りにもお金がかかるため、家政婦の在留資格でアルバイトは認められていないけれど、蘭桂坊にあるバーで働き始める。資格外就労ではないかと疑う警官に追われ、逃げた先でバーテンダーのイーサンに出会い、警官をやり過ごすためにとっさにイーサンと恋人どうしのふりをする。2人の出会いはロマンチックなものではなかったが、女性の方から積極的に働きかけて関係が始まった。

プレイボーイのイーサンは毎日のようにジョイに電話して「友だちになろう」と口説くが、家政婦とア

ルバイトで早朝から深夜まで忙しく、とにかくお金を貯めることで頭がいっぱいのジョイは、「ほしいのは友だちよりも仕事」と言って相手にしない。仕事の合間にジョイと会ったイーサンが、カナダに行くために必死で少しも楽しそうに見えないジョイに「ここには喜びがある」と言っても、ジョイは「ここに喜びはない」と返す。

ジョイはイーサンが香港の永住権を持って悠々自適の身だと思っていたが、イーサンがかつて恋人との関係を家族よりも優先させて永住権申請に失敗し、再び永住権を取ろうとしていることを知る。イーサンはジョイに本気になり始め、ジョイもイーサンに心を開き始める。ただしジョイはカナダに行くと思っており、2人はジョイがカナダに行く日までという限定付きで付き合うことにする。

●決断し行動する、新たな「泣く男」

もしイーサンがこれまでアルデンが演じてきた他の役だったら、「泣く男」の型に従って、ジョイにカナダに行かないでほしいと思うけれど自分からは何の決断も行動もしなかっただろう。しかし『ハロー、ラブ、グッバイ』のイーサンは決断して行動する。ジョイがカナダ行きの準備を進めると、イーサンは何とかしてジョイを引き留めようとする。香港の永住権申請まであと少しとなったイーサンにはこのタイミングで外国に出ることはできない。イーサンはバーテンダーをやめて自分のバーを開くことにする。店をジョイに手伝ってもらえば、ジョイはお金を稼ぐことができるし、2人で一緒に暮らすこともできる。イーサンの弟はまた女のために失敗すると言って反対するが、イーサンは自分ですべて費用を負担して末の弟を香港に呼び寄せて、長洲島で暮らす父のもとで家族と一緒に暮らせるようにする。その覚悟を見た弟はイーサンの決断を受け入れる。

イーサンはビルの屋上のスペースを借りて、テーブル1つと椅子2脚だけのささやかな食卓を作る。ジョイを招き、出会って1カ月目のお祝いの食事をする。これは自分のバーの仮オープンだと言い、最初のお客としてメッセージを残してほしいとジョイに頼む。ジョイはマジックペンで「Joy is here」と書く⁸⁾。

8) フィリピンの映画館で鑑賞していると、マジックペンを持ったジョイが文字を書く前に、観客が口々に「Joy is hereって書くよ」とつぶやいていた。

「ジョイ参上」だが、「ここに喜びがある」という意味にもなる。「ここに喜びはない」と言っていたジョイがイーサンと出会ったことで変化し始めている。イーサンは自分の店に「イーサンズ・ジョイ」(Ethan's Joy)と名付ける。「イーサンの喜び」とともに「イーサンのジョイ」という意味でもある。

●「家族のため」ではなく「自分のため」を選ぶ女

ジョイはカナダに行くお金が貯まってビザが取れる。ジョイは母に会いに行く。母は深圳市で暮らしていた。ずっと前に、家族の生活を支えるために1人で香港に来て家政婦として働いた。雇用主の中国人男性と親密になると、そのことを知ったジョイの父は、家族のために雇用主との関係を進めるようにと言ったという。ジョイの母は夫から見捨てられたと感じ、その恨みが積もっている。あと半年して香港の永住権が取れたら雇用主と結婚するのでフィリピンの家族と一緒に暮らすつもりはないと断言する。

ジョイはフィリピンの父に連絡をとり、カナダで働けることになったから状況が整ったらカナダに呼び寄せるつもりだと伝える。しかし予想に反し、自分たちはフィリピンを離れて暮らすつもりはないと父に言われる。自分がカナダで働くことで父母や弟たちをカナダに呼び寄せることができ、家族全員が一緒に暮らせると思って辛い思いに耐えてきたジョイは、カナダに行く理由がなくなってしまう。

ジョイが香港に留まってイーサンと結ばれるハッピーエンドの御膳立ては整った。イーサンはジョイに香港に留まるよう求める。仕事がなくとも一緒にいてくれさえすれば自分が稼ぐし、3年経てば永住権が取れるのでジョイと結婚できるし、結婚すればジョイも香港で働けるようになる。そうすればジョイはやりたいことを何でも選べると言うイーサンに対し、ジョイは反論する。何でも選べるといってもどれもイーサンが一人で考えたことで、自分がどう思うかは一言も尋ねてくれなかった。それに、自分には自分の夢があるから、自分に機会を与えたい。イーサンのことは愛しているけれど、自分の心の中に欠けたものがあって、それはイーサンの愛でも埋められない。ここに留まると言いたいけれど、いつの日か今日の選択を後悔するのが嫌なので留まると言えない。あなたのことを愛してる。でも自分のことはもっと愛してる。家族の

ためじゃなくて自分の将来のために働きたい。家族のためではなく自分のためにカナダに行きたいと言うジョイを、イーサンはイーサンズ・ジョイで待ってるよと言って送り出す。私のことを信じて私の夢のために働くことを許してくれたことを忘れないとイーサンに感謝し、あなたを愛しているから今は別れると言うジョイは、フィリピンのラブコメ映画の新しい女性の姿として輝いていた⁹⁾。

最後の数日を一緒に過ごした後、ジョイが香港の空港でカナダ行きの便の搭乗手続きを進める。飛行機が飛び立ったころ、イーサンはビルの屋上の自分のバーで、飛行機が飛んでいくのを1人寂しそうに見送っていた。

女性と母親の描かれ方の変化 ——『母と子』¹⁰⁾との比較から

『ハロー、ラブ、グッバイ』には香港で家政婦として働くジョイの友だちたちがDVDでフィリピン映画『母と子』を見ながら、主演のヴィルマ・サントスに訴えかけている場面がある。

●子の近くにいなければ悪い母とされる苦悩

『母と子』(Anak, 2000年)は、家族のために香港で家政婦として働いたジェシーが6年ぶりにフィリピンの家に戻る場面で始まる。空港に迎えに来た息子のマイケルと次女のダダイはすっかり大きくなったのでジェシーははじめ気が付かない。家に戻ってきて母として仕切ろうとするジェシーにマイケルとダダイは心を許そうとしないが、しだいに打ち解けていく。しかし長女のカーラは父の葬式にも戻ってこなかったジェシーを恨みに思っており、あえて自暴自棄に振舞うカーラをジェシーが注意しても反抗的な態度を取る。実の子は置き去りにして出て行って外国では他人の子の世話をするのかというカーラの言葉は、出稼ぎに行った親によって家に残された子どもたちの声を代弁している。

9) キャスリンはラブチームの相手でも私生活でも恋人であるダニエルについて、自分のことを信じてくれてこの映画の撮影のために1人で香港に行くことを許してくれたダニエルに感謝するとコメントを発表した。ここでも現実と映画が重ね合わせられている。

10) 出稼ぎする母と残された家族の関係については[山本 2017]を参照。

これに対し、ジェシーや香港で家政婦だった友人たちの言葉は海外に働きに出た人たちの声を代弁している。自分たちは家族のために自分を犠牲にして働いた。素敵な家に住みたいし、子どもを学校に行かせたい。子どもたちにちゃんとした食事をとらせたい。そのためには家族の誰かが外国に働きに行くしかなかった。夫のことは愛しているし、子どもたちのことはもっと愛している。自分よりも子どもたちのことを愛している。だからこそ、家族に背を向けて、涙をこらえて香港に行った。

地獄の苦しみを味わっても、子どもたちのためと考えて耐えてきた。苦勞するのは自分たち母親。男が外国で働くと、子どもに食べ物や着る物を与えたとか学校に行かせたとか言って立派な父親だとみんなが褒める。でも女は、身も心もすべて子どもに捧げて働いても、子どもたちのそばにいなかったから悪い母親だと言われる。したくても我が子の世話ができない母親のつらさを思いやしてほしい。

●「嘆き」の吐露から「自立」の支持へ

ジェシーは再び香港に働きに行く。カーラはジェシーと和解し、海外出稼ぎフィリピン人について調べて学校で発表したいという手紙をジェシーに送る。形の上では家族が和解したようになっているが、ジェシーは家に居場所がなくなって香港に戻っており、実際には和解が成り立たないままの結末となった。

ジェシーを演じたヴィルマ・サントスはベテラン女優で数多くの映画やドラマに出演しているが、『母と子』は代表作の1つで、海外出稼ぎ労働に出る母親とその子どもたちの関係を描いた映画ではヴィルマ・サントスが出演することが多い¹¹⁾。

『ハロー、ラブ、グッバイ』では、ジョイの友人たちが、私たち女は身も心もすべて捧げると愚かだと言われる、自分のために行動すると自分勝手だと批判されるという。男が外国で働くと、子どもに食べ物や着る物を与えたとか学校に行かせたとか言って立派な父親だとみんなが褒めるけれど、女は、身も心もすべて子どもに捧げて働いても、子どもたちのそばにいなかったから悪い母親だと言われるという『母と子』のセリ

フと重なっている。ただし、『ハロー、ラブ、グッバイ』では女(母親)の不憫な境遇を嘆くだけでなく、ジョイを通じて、女が自分の将来を自分で決めることを全面的に支持している。

新たな物語の結末をめぐる フィリピン国民の反応

●女性の決断を認め後押しする国民的英雄の姿

『ハロー、ラブ、グッバイ』はジョイが乗ったと思われる飛行機をイーサンが見送る場面で終わる。イーサンを演じたアルデンはホセ・リサルを演じたことがあり、イーサンの姿にはホセ・リサルの姿が重なって見える。ラストシーンは、フィリピンの国家英雄ホセ・リサルがこの場に留まって一緒に家族を作ろうと呼びかけたにもかかわらず、家族のためという大義名分がないにもかかわらずその呼びかけを断り、自分一人のために外国に旅立っていった女性をホセ・リサルが見送っているという姿にも見える。フィリピンに留まってフィリピン国民として尽くすべきという考え方に対し、自分のためにフィリピンの外の世界に出て行ってもよいとするメッセージが感じられる。

映画を鑑賞した観客の間では、イーサンとジョイは最後に本当に別れてしまったのが話題になった。フィリピンのラブコメの型に従えばイーサンとジョイはハッピーエンドを迎えるはずで、そのことがはっきりと描かれていないので落ち着かないと感じる観客が多かったことを示している。SNSなどを通じて結末についてのいろいろな解釈が披露された。なかでも、イーサンが見ていた飛行機にジョイが乗っていたという場面はなかったのも、ジョイはカナダに行かずイーサンのもとに戻って一緒に暮らしたのではないかという解釈が多く、支持を集めていたようである。

●物語への国民的欲求を示すラブチーム・ファン

メガヒットを受けて続編への期待の声が上がった。公開初日の反応を受けてアルデンが続編への期待に言及すると、キャシー監督は、あと2作を撮ったら監督をやめるつもりだとしたうえで、続編の可能性は否定しないとコメントした。それを受けてキャスリンも同様の発言をしたと報じられた。続編の可能性は多くの観客から歓迎された。公開直後から続編を求める声

11)『彼女についてのすべて』(2016年)ではヴィルマ・サントスが母親役で出演し、間接的に子どもから、自分たちは海外に働きに行っていたと思ったことはないかと批判される[山本 2017]。

が多数上がったことは、イーサンとジョイが別れたままでは物語が終わったと思えないという観客の思いを反映していると考えられる。

続編を求める多くの声にもかかわらず、続編は別の理由でおそらく作られないことが明らかになった。ジョイを演じたキャスリンと恋人のダニエルのラブチームのファンたちが、キャスリンがダニエルではない相手と恋人どうしを演じたことが受け入れられないと強く批判したためである。アルデンは、ラブチームでなくても興行的に成功したことは脚本と演技によって映画が成功することの証明だとコメントしたが、キャスリンは今後一切ダニエル以外の相手と恋人どうしの役を演じないと発表した。これによって続編への期待は断たれることになった。

フィリピンの観客がラブチームの熱狂的なファンであるだけでなく、ラブチーム以外の相手と恋人どうしの役を演じることに強く反対したことは、物語に現実を重ねて見たいという欲求、あるいは物語を観たときにそこに自分を入れた姿を想像したいという欲求が反映されていると言えるだろう¹²⁾。

●映画の結末を規定したノベライズ

結論に対する反響が大きかったため、制作会社はこの映画のノベライズ版を出版し、そこにイーサンとジョイが結ばれてハッピーエンドになるラストシーンを書き加えた [Lasar 2019: 143-144]。ジョイはカナダで2年間働いた後にアメリカに移り、サンフランシスコの病院で職を得ていた。生活にも慣れ、1人で暮らしていくことに不安がなくなった。そんなある秋の日、仕事を終えて家に帰ろうとしているジョイの前にイーサンが現れ、再会を果たす。

香港に戻って店に来てほしいというイーサンの願いとは違う形での再会となった。2人はもちろん再会を喜んだだろうが、アメリカで1人で暮らしていると自信を持つようになっていたジョイの喜びは、ずっと会いたいと思っていた恋人にようやく会えたという喜びとは少し違っている。イーサンがジョイを訪ねてアメリカにきたということは、イーサンは香港の永住権を取ることができて、アメリカへの渡航制限も解除されたということだろう。ジョイが香港でイー

サンと再会するという後日談にしなかった理由の1つは、ジョイがイーサンのもとに戻って「イーサンのジョイ」になるという結末にしたくなかったためだろう。ノベライズ版はイーサンとジョイを再会させることで映画を見てやきもきした観客たちを安心させたが、そのことによって、映画ではジョイが1人でカナダに飛び立ったことを確かにした。家族のためではなく自分のために生きる女性を登場させ、彼女に喜びを与えたことは、確かに制作者が意図したことだった。

参考文献

- Lasar, Charmaine. 2019. *Hello, Love, Goodbye: The Novel*. Creative Programs.
- 山本博之 2016a 「ポーズとフレーム——フィリピンの国民的物語の身体化」『衝突と変奏のジャスティス』青弓社、pp. 90-113。
- 山本博之 2016b 「脱アメリカ的正義の模索——フィリピンのスーパーヒロイン「ダルナ」」『たたかうヒロイン——混成アジア映画研究2015』CIAS Discussion Paper 60、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 8-16。
- 2016c 「アルダブ現象に見る現代フィリピンのメディアにおける無声の共同体」『たたかうヒロイン——混成アジア映画研究2015』CIAS Discussion Paper 66、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 7-16。
- 2017 「フィリピン映画に見る父性の諸相——恋愛ドラマを中心に」『不在の父——混成アジア映画研究2016』CIRAS Discussion Paper 67、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 30-38。
- 2018a 「フィリピンのゲイ・コメディ映画に投影された家族のかたち——ウェン・デラマス監督の『美女と親友』を中心に」『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート。
- 2018 「聖母と人魚——フィリピン映画におけるゲイ・カップル表象」『母の願い——混成アジア映画研究2017』CIRAS Discussion Paper 77、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 34-40。
- 2019 「人魚の物語のハッピーエンド——2018年のフィリピン映画」『正義と忠誠——混成アジア映画研究2018』CIRAS Discussion Paper 82、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 30-32。

12) 風景写真に自分の顔写真を貼りこむことについては[山本 2016a]を参照。